

青年期の“孤独観”を測定する尺度の作成

野上 康子¹⁾ 天谷 祐子¹⁾ 太田 伸幸¹⁾
栗田 統史²⁾ 布施 光代¹⁾ 西村 萌子²⁾
長谷川 美佐子²⁾ 胡 琴菊²⁾

問題と目的

孤独は、私達の中に広く行き渡った感情反応である(工藤, 1986)。“孤独感とは、心理学者が長い間関心を示してきた重要な個人的、社会的問題のひとつである。”と広沢・田中(1984)が述べているように、孤独を感じることは、人々に様々な意味で広く影響を及ぼす。そして時には、“激しい苦痛と強烈な不快感を喚起させ”(工藤・西川・熊取谷, 1985)、“アルコール依存症、抑うつ、青年の非行などの非社会的もしくは反社会的行動は、孤独感と密接に関連”(工藤・西川, 1983)する場合さえ出てくる。では、どのような時に孤独を感じると、このような深刻な問題につながるのだろうか。本研究では、人は、どのような状態に陥った時に孤独を感じるか、つまりどのような“孤独感”観を持っているのかを調べることを目的とする。

まず、孤独感の定義については、社会学者によってなされている。Weiss(1973)は、“孤独感とは常に、ある特定の関係の欠如への反応、もっと正確には、ある特定の関係を示す道具立ての欠如への反応”と定義している。また、Perlman & Peplau(1981)は、“孤独感とは、人の社会的ネットワークが、量的あるいは質的にある重要な点で不足しているときに生じる不快な経験”としている。Sermat(1978)は、“孤独感とは、個人がその時点で知覚している対人関係と、過去の経験から持ちたいと望んでいる関係、あるいは実際に経験したことのない理想的な関係との間で経験される食い違い”としている。いずれも、特定の社会的関係の不足やズレに焦点を当てて、孤独感の定義を行っている。

このように、孤独感そのものは否定的な感情であるが、孤独感をもたらす意義については、肯定的立場と否定的立場に分かれている。肯定的立場の一つとしては、臨床心理学や精神医学の分野で、治療経験を通して得た知見が挙げられる。精神分析の立場から小此木(1979)は、“孤独に耐え、孤独に居直る所から、人生をつづけることを悟る体験は、自我の自立の原体験となる”と人格形成との関連で述べている。また、心理臨床の治療過程では孤独感の変化(堀, 1963; なだ, 1967; 小此木, 1971)に注目することにより、人との関わりや死に対する有限性を自覚するようになることを指摘している。落合(1988)も、“孤独感の苦痛は、青年が社会的・情緒的な人間関係を高め、発展させるように働くという意味で、積極的に作用する”と述べている。つまり、孤独の肯定的な意味としては、孤独を感じることににより自己省察が行われ、自我の自立や哲学的な含蓄を含む人間観の形成が行われるというものであろう。否定的立場としては、“孤独感を感じる者は、社会性が未熟で、閉鎖的、利己的、排他的、自己縮小的、独善的傾向がある。こうした傾向が強まると、人との親密な人間関係を失い、独善的な生活態度や人生態度を発展させる。人には、孤独感を感じさせないようにすることが、人格形成上望ましい(チェルネ、スルタンとウィリアムス, 1980)”というものである。

本研究では、孤独感とは人格形成上積極的な意味があるという肯定的立場に立ち、孤独にアプローチする。孤独をどのように感じるか、どのように受け入れていくかということは、他者との人間関係を営む上で、その人の基軸となるものである。また、孤独を感じる事が人間存在の捉え方や、自己理解・人間理解に果たす役割は大きいと考えられる。

このような孤独に初めてぶつかり、人格形成に重要な影響を及ぼす時期は、青年期であろう。本研究では、発達段階のうち、特に青年に注目する。久世(1962)が

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(後期課程)

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程(前期課程)

“内面生活の展開は、青年を孤独にする”と述べているように、発達的变化として青年期に始まる内面生活は孤独感を生じさせる。その結果、青年期特有の社会的関係の持ち方や価値観が形成されたり、発達課題への取り組みが見られたりするようになる。戸田（1970）は、児童期にも成人期にも見られない青年期独特の激しい友情について、“青年は、孤独を求めるとともに、その耐えがたい孤独を救ってくれる相手として、また自分のさまざまな悩みを理解し、なぐさめてくれる相手として、激しく親友を求める”と説明している。このように、孤独が青年に及ぼす影響は特に大きいと思われる。

では、青年に孤独を生じさせる要因としては、どのようなものが考えられるだろうか。ペプローとパールマン（1982）を参考に、青年の孤独を生じさせる要因として、先の発達的变化に加えて、以下の3つの点が考えられる。第1には、青年がおかれる社会的関係が挙げられる。“青年期というのは、両親から離脱し、新しい依存関係を形成しつつ自立への道を歩み始める時期”と広沢・田中（1984）も述べているように、青年期に両親からの分離・独立を果たし、新しい関係の構築に向かうことが課題の一つに挙げられる。この課題に取り組む際、青年は、両親からの孤立（工藤・西川，1983）と同時に、友達からの孤立（工藤・西川，1983；広沢・田中，1984）も感じられる。“青年期は人間関係の比重が親子関係から友人関係に移り、友人との親密な関係に自分の居場所を求め、そこでの自己開示が孤独感を癒す場となる”（性格心理学ハンドブック）とも述べられている。また、青年期は、アイデンティティの確立が発達課題と言われているように、自己概念の再構成が行われる時期である。青年は、自身に課される責任の感覚を増大させる。それに伴い、とまどい、意志決定のための情報収集、周囲の人はどうするのかといった不安等により親和欲求が高まり、その結果孤独感を感じやすくなる。つまり、自律性を身につけ、自身で意志決定する上で、孤独感が生じてくる（工藤1986）というものである。第2には、孤独感と関連する個人的特性が挙げられる。孤独の原因を「性格」に帰属することが、社会人30代・40代より大学生が多いという工藤・西川・熊取谷（1985）の考察から、青年は、孤独を自身の個人的特性に帰属しやすい世代であることがわかる。また、孤独感と、個人的特性との関連を調べた研究では、自尊心の低さ（工藤・西川，1983）、自己開示傾向の低さ（Berg & French, 1979）、社会的不安の高さ（諸井，1987）が挙げられる。他にも、無力感、利己的、他人への無関心、社会的スキルの不足等が考えられる。第3には、青年がおかれているさらに広い社会構造過程が挙げられる。現代社会の価値の混乱が青

年を孤独にする（Peplau & Pearlman, 1988）といったものである。大日向（1990）も“今日の日本社会は、社会のシステムの複雑化、人々の生活様式や価値観の多様化などに伴って、何をもって一人前とするかの基準が非常に不明瞭である。”と述べ、社会そのものがアイデンティティを喪失している現代日本社会で、青年がアイデンティティを確立していくには、課題と困難を伴うことを指摘している。このように、青年に孤独を生じさせる要因は数多く見られる。

では、孤独感測定の尺度には、どのようなものがあるのだろうか。先行研究では主に、UCLA、LSOが挙げられる。UCLAで測定される孤独感は、例えば「私はだれからも無視されているように思う」といった、“孤独感の対人的定義に基づく”（諸井，1984）もの、つまり主として、現在、実際の人間関係がうまく営めない実状であると考えられる。日本では、このUCLAの邦訳を使用した研究は、工藤・西川（1983）、諸井（1984）の研究が挙げられる。彼らは、いずれも孤独感を、願望レベルと達成レベルの間の食い違いから生じるものとして孤独感を一次的に捉えている。また、落合による一連の孤独感研究では、UCLAでは扱われてこなかった、対自・対他的・時間的展望の次元を扱い、多次元的なアプローチを行っている。落合（1988）は、青年期の孤独感を「人と親密な関係を持とうとする志向性を持ちながら、それが実現しない時、人間同士の理解・共感はないと感じ、自分はひとりだと感じる」と意味合いは、自分を含む人が、個別性を持つ存在であるということに気づくことによって変化する」と定義している。そして、落合（1983）では、その定義をもとに孤独感尺度LSOを作成した。項目内容としては、「結局、自分はひとりでしかないと思う」「人間は、互いに相手の気持ちをわかりあえると思う」のように、2軸にからなる人間観（人間同士が共感可能かどうか、人間の個別性の自覚がなされているかどうか）によって、孤独の捉え方が4種類に異なり、発達的に変化すると仮定している。

また、孤独感に関連する先行研究では、孤独感の構造の発達の検討（落合，1974）、孤独感の因果帰属（工藤・西川・熊取谷，1985）、孤独感とパーソナリティの関係（例えば、孤独感と自己意識の関係（諸井，1985）や孤独感と自尊心の関係（工藤・西川，1983）など）が挙げられる。これらの先行研究では、孤独感がなぜ生じるのか、また孤独感がどのような構造になっているのか、どういった要因と関連しているのか、に関するものである。

これらの先行研究で生じてくる問題点としては、以下の3点が挙げられる。まず第1に、LSOは、孤独感と言うよりは人間観を測定しているといった感が強く、孤

独そのものを扱っているとは言い難い。LSOによる類型は、孤独感のタイプ分けと言うよりは人間観のタイプ分けであり、「どのような人間観を持つかによって、孤独を感じる場面や孤独に対するイメージが異なる」と言い換えた方がより正確であると思われる。それ故、実際の具体的場面に密接した孤独感を測定できないという問題点がある。つまり、aというタイプの孤独の捉え方をする人が、現実場面では友人から仲間はずれにされて孤独を感じることに関連しているのか、または自分の生き方に自信が持てない時に孤独を感じることに関連しているのかはわからないということである。これは、落合(1983)の言うように孤独の捉え方が4種類に異なるにしても、その捉え方の違いによって、実際の具体的場面ではどのように孤独の感じ方が異なるのかといった観点から孤独を測定するものは見当たらないということに集約されるだろう。第2に、UCLAでは、対人的側面での願望レベルと達成レベルの食い違いから孤独が生じるとしているが、個々人が明確に想定できるズレだけでなく、想定できないズレを積み重ねて「ふと」感じる孤独も存在すると思われる(例えば、「休みの日に予定がなかった時」「ふと我にかえて、人生がむなしくなった時」など)。そういった孤独は、UCLAや落合のLSOでも測定できないと思われる。つまり、意識的に想定できるズレや想定できないズレも包括した孤独を測定しよう、孤独の種類を網羅的にとらえようとする尺度が見当たらないと考えられる。第3に、先行研究の孤独感研究では、主に現在孤独かどうかを測定するものであり、どのような状況下のものを孤独と認識するかという個々人の枠組みそのもの——「孤独感」観を測定したものはまだ見られない。そこで、本研究では孤独を感じる場面をもとに、「孤独感」観を測定することを試みる。

さらに、この尺度の妥当性を考えるに当たり、「孤独感」観に関連すると思われる特性として、対人志向性と自己愛を取り上げる。いずれも、欲求水準を扱っている特性であることから取り上げた。UCLAにおいても、直接測定しているわけではないが、願望水準と実際的水準の差から孤独感が生起するという前提が存在した。よって、要求水準を実際に測定することにより、孤独感との関連を調べようとするものである。欲求水準が高い事柄に関しては、それが満たされない場合に孤独を感じると思われるが、そうでない事柄に関しては、満たされていなくてもあまり孤独を感じないと思われる。対人志向性尺度では、人間関係志向性や個人主義傾向(逆転)等、他者と関係を持っていたいという志向を測定している。他者と関係を持っていたいという要求が高いほど、それが満たされない時に孤独を感じるのではないかと考えら

れる。また、自己愛尺度では、注目・賞賛欲求が下位因子の一つにある。自己愛尺度に関しては、小塩(1998c)が友人関係のあり方との関連を調べており、注目・賞賛欲求は、他者に注目されたいという高い自己価値を持つ一方、他者の評価に敏感な特徴を有していることを示している。よって、注目されなかったり、他者からよい評価を得られない場合に孤独を感じると思われる。

以上から、本研究では、現実場面でのどのような状況下のものを孤独と感じるかという、青年の「孤独感」観を網羅的に測定することを第1の目的とする。そして、落合のLSOをもとにした孤独の捉え方の4種類によって、どのように「孤独感」観が異なってくるのかを調べる。また、「孤独感」観と対人志向性・自己愛尺度との関連を調べることで、「孤独感」観の特徴を明確化することを第2の目的とする。これにより、具体的場面に即したような孤独の種類を多次元から網羅的に捉え、青年に孤独を生じさせる要因へのアプローチをしたい。

方 法

1. 「孤独感」尺度の作成

まず、どのような状況に対して「孤独だ」と感じるかについて尋ねる「孤独感」尺度を作成した。

はじめに、本研究で想定している孤独感観(以下、孤独観)に関する現実場面として、主に4つの場面を想定した。一つ目は、周囲の中で、他者との差を感じるような場面から成る「差」に関する場面である。「差」の下位概念は、「成功」および「劣等感」の2つを想定した。つまり、自分だけが飛び抜けて成功することによって他者との差ができる場合と、自分だけが周りよりも劣ることによって他者との差ができる場合の2つを想定した。二つ目は、物理的に一人で行動する場面からなる「物理的一人」に関する場面である。「物理的一人」の下位概念は、単にひとりで行動することに関する「物理的一人」と、一人でしかできないような課題に取り組むことに関する「課題」の2つを想定した。三つ目は、対自的な側面で、「存在意義」に関する場面である。「存在意義」の下位概念は、ふと孤独を感じる、といった「ふとした孤独」や、自分の運命や生死について考えることに関する「運命」、自分に自信がないなどの「自己劣等感」からなる。四つ目は、「対人関係」に関する場面、下位概念は、他者との関係が少ない「関係欠乏」、自分のスキルがないため、あるいは他の理由で他者から疎外される「疎外・スキル欠如」、他者のことが理解できない、あるいは他者から理解してもらえない、といった「理解不可」、会いたい人に会えないといったことに関する「会えない」、さらに何らかの理由で関係がなくなること

青年期の“孤独観”を測定する尺度の作成

表1 孤独観56項目と下位概念との対応

	差		存在意義			物理的		対人関係				
	劣等感	成功	ふと	運命	自己劣等感	物理的	課題	理解不可	関係欠乏	喪失	疎外・スキル	会えない
1. 友達とのつきあいが、うわべだけになっている気がしたとき									1			
2. 周りの人のことを信じられないと感じたとき								1			1	
3. 自分だけが、責任の重い仕事を任されたとき							1					
4. 一日を漠然と過ごしたとき			1									
5. 自分のことを、よくわかってくれる人がいると感じたとき								-1				
6. 頼みたいことがある時に、気軽に人にものを頼めなかったとき									1		1	
7. 友達にあいさつをして、返事がなかったとき											1	
8. 親しい友達と離れていてあまり会う機会がないとき												1
9. 自分には本音で話せる友達がいないと感じたとき								1	1		1	
10. 家族とけんかをしたとき								1				
11. 一人だけ友達と違う授業をとったとき						1	1					
12. 周りの友達と自分の価値観が違っていることに気づいたとき								1				
13. この先どうしてよいかわからないと感じたとき					1							
14. 分の意見にみんなが反対したとき								1			1	
15. グループの中で、うまく立ち回れなかったとき											1	
16. 友達の中で、自分だけが必修の単位を落としたとき	1											
17. 親しい友達に軽蔑されたとき	1									1	1	
18. 周りの友達と比べて、自分は劣っていると感じたとき	1											
19. つきあっている彼（彼女）がいないとき									1			
20. 友達の中で、自分だけ成績が良かったとき		1										
21. 逢いたいときに恋人に逢えなかったとき												1
22. 自分は役に立たないと感じたとき					1							
23. 自分だけ、会話の内容についていけなかったとき	1										1	
24. 誰にも信用されなかったとき								1			1	
25. 自分の言ったことが、グループの中で無視されたとき											1	
26. 友達の中で、自分だけが飛び抜けて成功したとき		1										
27. 周りの人が、自分に対して遠慮をするとき											1	
28. 学校の友達と、学外で過ごす機会があまりないとき									1			1
29. ふと我に返って、人生がむなしくなったとき				1								
30. コンサートに一人で行ったとき						1			1			
31. つらい時に慰めてくれる友達がいないとき									1			
32. 一人でご飯を食べたとき						1						
33. 友達と意見が衝突したとき								1				
34. 一緒に頑張っていた友達が、あきらめてしまったとき										1		
35. 自分のやっていることに意義を見いだせなかったとき					1							
36. 親しい友達がいないとき									1			
37. 自分の気持ちを素直に表現できなかったとき											1	
38. ふと人恋しくなった時に、連絡できる人が思い浮かばなかったとき									1			
39. 周りの人から尊敬されて特別扱いされたとき		1									1	
40. 悩み事がある時に、誰も親身になってくれなかったとき									1			
41. 自分の生き方に自信が持てないとき					1							
42. 特に理由はないが、ふと気持ちが沈んだとき			1									
43. 自分の死について考えたとき				1								
44. 友達が少ないと感じるとき									1			
45. 一人でやりとげなければならない事柄に取り組んだとき							1					
46. 周りの人に名前を忘れられたとき									1		1	
47. 友達の中で、自分だけ恋人がいないとき	1								1		1	
48. 仲の良かった友達との関係が、気まづくなったとき										1		
49. 人と連れ立って歩いたとき						-1						
50. 家族と意見が合わないとき								1				
51. 一人で映画を見に行ったとき						1						
52. 親しい人の死について考えたとき				1						1		
53. 休みの日に予定がなかったとき						1		1				
54. 困っている時に助けてくれる人がいなかったとき								1				
55. 自分の誕生日に誰も気づかなかったとき								1				
56. 親しい友達との関係がなくなったとき									1			

に関する「喪失」である。

これらの枠組みをもとに、191項目の項目プールを作成した。このうち、似たような内容の項目や、あまりにも特殊な状況を扱った項目を省き、わかりづらい表現を改めた上で、最終的に56項目が選択された。各項目がどの場面に対応しているかを表1に示す。

2. 仮説

本研究で想定している孤独観に関する現実場面として、「差」「物理的一人」「存在意義」「対人関係」の4つの場面を想定した。

また、落合による孤独感の捉え方は、前述のように2つの軸（縦軸：人間同士が共感可能かどうか、横軸：人間の個性性についての自覚がなされているかどうか）があり、その2軸によって、A型からD型まで4つの孤独感の捉え方が生じてくるとしている（図1参照）。落合（1988）によると、A型の孤独感は「家族や身近な集団のなかで情緒的・依存的融合状態を保っている者が、客観的・空間的な孤立状態で感じる孤独感」、B型の孤独感は「理想的理解者の追求を特徴とした理解者の欠如している状態での孤独感」、C型の孤独感は「他人から隔絶した自閉的な人間関係をもとうとしている者の孤独感」、D型の孤独感は「個性性を承知しながら、なお、ひとりではいられないで、人と関わりあおうとする者が感じている充実した独立態としての孤独感」となり、発達の的にA型からD型に順に変化するとしている。

本研究では、孤独観で想定している4つの現実場面が、落合のLSOの4つのタイプ、もしくは2つの軸とどのように関連するのかに注目している。それに関する仮説を以下に示す。孤独観における「差」の場面については、LSOによる個性性に気づいている型（C、D型）は、気づいていない型（A、B型）よりも孤独感を感じないと報告すると予想される。これは、個性性に気づいてい

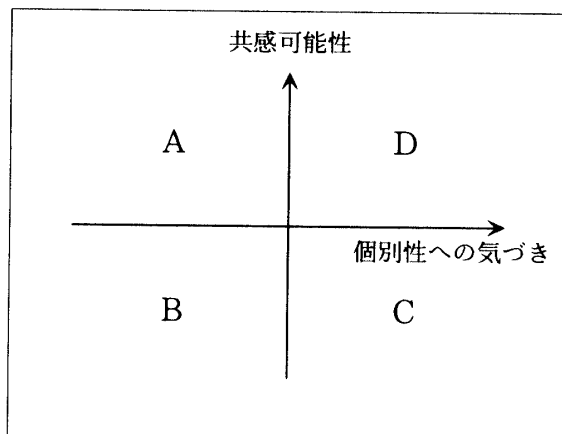


図1 LSOによる孤独の類型

れば、自分だけが成功したり、劣等感を感じたりする場面においても、「自分は自分」と認識することができると思われるので、孤独感を感じないと予想されるからである。また、孤独観における「物理的一人」の場面については、LSOの個性性に気づいている型の人は、気づいていない型の人よりも孤独感を感じにくいと予想される。これも、「差」の場面同様、個性性に気づいていれば、物理的に一人であっても特に孤独感を感じにくいと思われる。逆に個性性に気づいていない場合は、物理的に一人になった状況で、他者とのつながりも途絶えてしまうかのような気分となり、孤独感を感じやすいのではないと思われる。また、孤独観における「存在意義」の場面については、LSOの共感可能性の軸と正の相関（共感可能と感じていれば、存在意義を考えるような場面において孤独感を感じると報告するだろう）が予想される。これは、他者と共感可能と考えている場合、不可能と考えている場合よりも、ふと感じるような孤独をより孤独だと感じるだろう。なぜなら、共感不可能と考えている場合は、ふと感じるような孤独については、すでに「あきらめ」の感情を持っており、孤独を感じにくいと思われるからである。また、孤独観における「対人関係」の場面のうち、「会えない」場面については、A型に当てはまる人がより孤独を感じやすいと予想される。これは、A型は、他者との融合状態にあるので、普段はあまり孤独感を感じないが、「客観的・空間的にみてわかる孤立状態において」（落合、1988）は孤独を感じやすいという特徴から予想できよう。また、「対人関係」の場面のうち、人から「疎外される」場面については、C型に当てはまる人が、他の型の人よりも、より孤独を感じにくいと予想される。これは、C型の孤独の特徴として、「自分は一人だ」と感じ、他者との関係を自分から回避してしまう傾向が強いと思われる。よって、疎外される場面においても、「むだだとあきらめて」いることで、孤独を感じないと報告するのではないかと考えられる。

3. 調査の実施について

調査対象 愛知県・岐阜県内の大学生・短期大学生・専門学校生 525名（男性113名、女性410名、性別不明2名）。平均年齢19.5歳（18歳～33歳）。

調査時期 1999年7月

調査方法 授業時間を利用した集団による質問紙調査、もしくは授業中に質問紙を配布し、後日、回収した。

質問紙の構成 学校名、年齢、性別を問うフェイスシー

トの他に、以下の尺度を用意した。

(a) 孤独観尺度

どのような状況に対して「孤独だ」と感じるかについて尋ねる「孤独観」尺度を作成した。本研究では孤独の規定因を多次的に捉えるアプローチをとっている。まず、孤独を感じる条件として、物理的条件と心理的条件の2つを想定し、さらにそれらの条件を対他次元と対自次元で分類することを試みた。その結果、劣等感、および他者より成功したことから感じる孤独を表す「差」、ふと感じる孤独、運命について考えた時感じる孤独や他者と比較することによって生じる自己劣等感などを表す「存在意義」、物理的に1人である状況や困難な課題に取り組まなければならないで感じる孤独を表す「物理的一人」、他者との相互理解不可能、親密な関係を築けないような関係欠乏、環境が変化することによる親密な関係の喪失、人間関係をスムーズにするためのスキル欠如、グループの中で疎外されたり、会いたいののに会えないというような状況から感じる孤独を表す「対人関係」の4つの下位カテゴリーを設定した。このようなカテゴリーをもとに作成された項目群から56項目が選択された。反応形式は、5「とても孤独だ」、4「どちらかというと孤独だ」、3「どちらともいえない」、2「どちらかというと孤独でない」、1「まったく孤独でない」の5件法である。

(b) 孤独感の類型判別尺度 (LSO)

落合 (1974, 1983) は、青年期の孤独感とは (1) 人間同士共感し合えると感じ (考え) ているか否か、(2) 人間 (自己) の個性に気づいているか否かという2つの次元から構成されていることを示し、この2つの次元によって以下の4つの類型に分類可能であるとした。その4つの類型とは、A型 (人間同士は理解できると思い人間の個性に気づいていない型)、B型 (人間同士は理解できないと思い、かつ個性に気づいていない型)、C型 (人間同士は理解できないと思い、かつ個性に気づいている型)、D型 (人間同士は理解できると思い、かつ個性に気づいている型) である。落合 (1983) は、青年がこれらの類型のいずれにあてはまるかを判別するために、16項目からなる孤独感類型判別尺度 (Loneliness Scale by Ochiai; LSO) を作成した。この尺度は、「人間の理解・共感の可能性についての考え方 (対他次元)」(LSO-U) と「人間の個性の自覚」(LSO-E) という2つの下位尺度から構成されている。反応カテゴリーの形式は、5「はい」、4「どちらかというとはい」、3「どちらともいえない」、2「どちらかというとはいえない」、1「いいえ」の5件法である。

(c) 改訂版UCLA孤独感尺度 (UCLA)

孤独感の測定の際、Russell, Peplau & Ferguson (1978) は一次元的アプローチをとり、UCLA孤独感尺度を作成した。一次元的アプローチとは、孤独は本来、その経験された強度の中で変化する、単一の、あるいは一次元的現象であるとみなす立場である。その後、Russell, Peplau & Cutrona (1980) は、すでに標準化されていた孤独感尺度を再検討して、20項目からなる改訂版尺度を構成し直した。工藤・西川 (1983) はこれを翻訳し、邦訳版尺度を作成した。反応カテゴリーの形式は、4「しばしば感じる」、3「時々感じる」、2「めったに感じない」、1「決して感じない」の4件法である。

(d) 対人的志向性尺度 (IOS)

Rubin & Brown (1975) によれば、対人場面における行動の決定過程に影響する要因は、「勢力」「動機的志向性」「対人的志向性」の3つの概念にまとめられる。勢力とは二者の地位や利益構造などが対等かどうかということであり、動機的志向性とは他者と協力して利益を得るのか、競争するのか、自分の利益のみに関心を向けるのかといった、協同的、競争的、個人主義的動機づけを問題とする。そして、最後の対人的志向性 (Interpersonal Orientation; IO) は対人相互作用場面における個人差要因を統合する概念として提唱されたものである。Swap & Rubin (1983) は、IOは (a) 自分自身に直接影響を及ぼすような他者の行動に対する反応性、(b) 他者がどんな人物であるかに関する関心、(c) 社交性などに関連するその他の側面、の3領域から測定されるとし、29項目からなる対人的志向性尺度 (Interpersonal Orientation Scale; IOS) を作成した。斎藤・中村 (1987) は、Swap & Rubin (1983) の対人志向性尺度を翻訳し、Rubin & Brown (1975) に記述されている典型的な高IO者と典型的な低IO者の行動特徴に基づいて新たな項目を考案して、18項目からなる対人的志向性尺度を構成し直した。この尺度は「人間関係志向性」「対人的関心・反応性」「個人主義傾向 (逆転)」という3つの下位尺度から構成されている。反応カテゴリーの形式は、5「まったくそう思う」、4「どちらかというと思う」、3「どちらともいえない」、2「どちらかというと思わない」、1「まったく思わない」の5件法である。

(e) 自己愛人格目録短縮版 (NPI-S)

Raskin & Hall (1979) は、正常な人格特性としての自己愛傾向を測定する目的で、自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory; NPI) を開発した。日本では大石ら (1987) がRaskin & Hall (1979) のNPI54項目を日本語訳し、NPI日本語版を作成した。その後小塩 (1998b) は、NPI日本語版 (大

石ら, 1987) をもとに, 佐方 (1986) によって見出された「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」という3因子に対応し, より平易な30項目からなるNPI-S (Narcissistic Personality Inventory-Short Version) を作成している。この尺度は, 自尊感情や自信といった強い自己肯定感を表す「優越感・有能感」因子, 自分が他者に注目されたり賞賛されることを期待する「注目・賞賛欲求」因子, 自分の意見をはっきり言うことや, やや自己中心的という言葉で表せるような内容の項目からなる「自己主張性」因子の3つの下位尺度から構成されている。反応カテゴリーの形式は, 5「とてもよくあてはまる」, 4「どちらかというにあてはまる」, 3「どちらともいえない」, 2「どちららかというにあてはまらない」, 1「まったくあてはまらない」の5件法である。

なお, 全体の項目数が多くなることを避けるために, 質問紙の構成として「孤独観尺度・LSO・UCLA・IOS」のパターンと「孤独観尺度・LSO・UCLA・NPI-S」のパターンの2種類を用意し, ランダムに配布した。被験者は, フェイスシート, 孤独観尺度, LSO, UCLA, IOSもしくはNPI-Sの順に回答を行ったことになる。

結果と考察

1. 孤独観尺度について

1) 孤独観尺度を構成する項目について

まず, 孤独観に関する56項目に関して, 平均値および標準偏差を求めた (表2)。

平均値が5件法の中点である3より小さい項目, つまり, 孤独だとは感じられない項目は56項目のうち14項目で, 全体の4分の1であった。このことから, 今回用意した項目が, 全体として孤独だと感じられやすい項目に偏っていたということがわかる。平均値が低い, つまり, 孤独でないと感じられる項目は, 逆転項目として想定した第5項目「自分のことを, よくわかってくれる人がいると感じたとき」($m=1.3$) や, 第49項目「人と連れ立って歩いたとき」($m=2.1$) の他, 第20項目「友達の中で, 自分だけ成績が良かったとき」($m=1.9$) や第26項目「友達の中で, 自分だけが飛び抜けて成功したとき」($m=2.2$) など, 「差」の下位概念である「成功」に関する項目が多かった。特に平均値が高い, つまり, より孤独だと感じられやすい項目は, 第24項目「誰にも信用されなかったとき」($m=4.3$), 第56項目「親しい友達との関係がなくなったとき」($m=4.2$) など, 「対人関係」に関する項目が多かった。また, 標準偏差の大きい項目は, 第51項目「一人で映画を見に行ったとき」($SD=1.41$),

第32項目「一人でご飯を食べたとき」($SD=1.37$) など, 「物理的一人」に関する項目が多く, 標準偏差の小さい項目は, 第5項目「自分のことを, よくわかってくれる人がいると感じたとき」($SD=0.72$), 第24項目「誰にも信用されなかったとき」($SD=0.93$) など, 「対人関係」に関する項目が多かった。ここから, 物理的に一人である状況に関しては, それを孤独と見なすかどうかについての個人差が大きい, 対人関係が希薄である状況に関しては, 多くの人が孤独であると見なすという様子がわかる。

2) 孤独観56項目に対する因子分析

孤独観に関する56項目に対して因子分析 (主成分分解, プロマックス回転) を行った。固有値の大きさは, 第1因子から順に15.22, 3.66, 2.40, 2.08, 1.76, 1.59, 1.32…であった。一因子性が高いが, 第1因子の説明率は30%に到らず, 固有値の変化の仕方及び解釈のしやすさから4因子解を適当と判断した。累積説明率は, 42.97%であった。プロマックス回転後の各項目の因子負荷量を表3に示す。

まず, 第1因子は, 第36項目「親しい友達がいないとき」の負荷が.70, 第40項目「悩み事がある時に, 誰も親身になってくれないとき」の負荷が.69, 第24項目「誰にも信用されなかったとき」の負荷が.67と, 「援助」をしてくれる人がいないことを直接質問している項目, 「援助」関係を支える周辺的なことに関する項目, 友人関係そのものがないことに関する項目への負荷が高かった。これらのことから, 第1因子を「対人関係の欠乏による孤独」因子と命名した。

第2因子は, 第41項目「自分の生き方に自信が持てないとき」への負荷が.80, 第35項目「自分のやっていることに意義を見いだせないとき」への負荷が.74, 第29項目「ふと我に返って, 人生がむなしくなったとき」への負荷が.58と, 自分の基準と現在を照らし合わせてどのくらい基準から離れているかをたずねる項目や, 何らかの自己基準に達してないこと, または, 目標が曖昧になったり, 方針が定まらずにむなしくなったと考えられる項目への負荷が高かった。これらの項目は自己の内面へ目を向けることによって感じる孤独と思われるので, 第2因子を「対自的孤独」因子と命名した。

次に, 第3因子に関しては, 第14項目「自分の意見にみんなが反対したとき」の負荷が.71, 16項目「自分だけが, 必修の単位を落としたとき」の負荷が.60, 第15項目「グループの中で, うまく立ち回れなかったとき」の負荷が.59と, 集団との関係が良くないことをたずねる項目 (良くない人間関係) や集団の構成員とは別のことをする側面 (構成員との違い) をたずねる項目などへ

青年期の“孤独観”を測定する尺度の作成

表2 孤独観56項目の平均値及び標準偏差

項 目	平 均	SD
1. 友達とのつきあいが、うわべだけになっている気がした	4.0	0.97
2. 周りの人のことを信じられないと感じた	4.0	1.08
3. 自分だけが、責任の重い仕事を任された	3.1	1.18
4. 一日を漠然と過ごした	2.6	1.27
5. 自分のことを、よくわかってくれる人がいると感じたき	1.3	0.72
6. 頼みたいことがある時に、気軽に人にものを頼めなかった	3.1	1.02
7. 友達にあいさつをして、返事がなかった	3.8	1.08
8. 親しい友達と離れていてあまり会う機会がない	3.1	1.14
9. 自分には本音で話せる友達がいないと感じた	4.1	1.02
10. 家族とけんかをした	2.7	1.18
11. 一人だけ友達と違う授業をとった	3.1	1.31
12. 周りの友達と自分の価値観が違っていることに気づいた	2.7	1.17
13. この先どうしてよいかわからないと感じた	3.4	1.20
14. 自分の意見にみんなが反対した	3.2	1.17
15. グループの中で、うまく立ち回れなかった	3.6	1.01
16. 友達の中で、自分だけが必修の単位を落とした	3.7	1.29
17. 親しい友達に軽蔑された	4.1	1.09
18. 周りの友達と比べて、自分は劣っていると感じた	3.3	1.19
19. つきあっている彼（彼女）がいない	3.1	1.33
20. 友達の中で、自分だけ成績が良かった	1.9	0.98
21. 逢いたい恋人に逢えなかった	3.7	1.20
22. 自分は役に立たないと感じた	3.7	1.08
23. 自分だけ、会話の内容についていけなかった	3.8	1.04
24. 誰にも信用されなかった	4.3	0.93
25. 自分の言ったことが、グループの中で無視された	4.0	0.98
26. 友達の中で、自分だけが飛び抜けて成功した	2.2	1.01
27. 周りの人が、自分に対して遠慮をする	3.3	1.06
28. 学校の友達と、学外で過ごす機会があまりない	3.0	1.11
29. ふと我に返って、人生がむなしくなった	3.6	1.23
30. コンサートに一人で行った	3.4	1.34
31. つらい時に慰めてくれる友達がいない	3.9	1.07
32. 一人でご飯を食べた	2.8	1.37
33. 友達と意見が衝突した	2.7	1.09
34. 一緒に頑張っていた友達が、あきらめてしまった	3.2	1.11
35. 自分のやっていることに意義を見いだせなかった	3.1	1.06
36. 親しい友達がいない	4.2	0.96
37. 自分の気持ちを素直に表現できなかった	3.1	1.08
38. ふと人恋しくなった時に、連絡できる人が思い浮かばなかった	3.9	1.04
39. 周りの人から尊敬されて特別扱いされた	2.6	1.15
40. 悩み事がある時に、誰も親身になってくれなかった	4.1	0.99
41. 自分の生き方に自信が持てない	3.4	1.14
42. 特に理由はないが、ふと気持ちが沈んだ	3.6	1.16
43. 自分の死について考えた	3.3	1.29
44. 友達が少ないと感じる	3.5	1.20
45. 一人でやりとげなければならない事柄に取り組んだ	2.8	1.25
46. 周りの人に名前を忘れられた	3.6	1.16
47. 友達の中で、自分だけ恋人がいない	3.3	1.34
48. 仲の良かった友達との関係が、気まづくなった	3.8	1.04
49. 人と連れ立って歩いた	2.1	1.03
50. 家族と意見が合わない	2.5	1.08
51. 一人で映画を見に行った	3.1	1.41
52. 親しい人の死について考えた	3.8	1.14
53. 休みの日に予定がなかった	2.7	1.33
54. 困っている時に助けてくれる人がいなかった	4.0	0.98
55. 自分の誕生日に誰も気づかなかった	3.9	1.24
56. 親しい友達との関係がなくなった	4.2	0.97

表3 孤独観56項目に対する因子分析（主成分分解，promax回転）の回転後の負荷量

項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	h ²
36. 親しい友達がいない	.70	.09	.01	.05	.50
40. 悩み事がある時に、誰も親身になってくれなかった	.69	.14	.06	-.01	.51
24. 誰にも信用されなかった	.67	.08	.16	-.16	.51
31. つらい時に慰めてくれる友達がいない	.66	.05	.09	.19	.48
56. 親しい友達との関係がなくなった	.65	.09	.02	.08	.43
9. 自分には本音で話せる友達がいないと感じた	.63	.03	.19	-.02	.43
54. 困っている時に助けてくれる人がいなかった	.59	.11	.07	.13	.38
38. ふと人恋しくなった時に、連絡できる人が思い浮かばなかった	.59	.20	-.12	.09	.41
1. 友達とのつきあいが、うわべだけになっている気がした	.59	.08	.01	-.01	.35
17. 親しい友達に軽蔑された	.55	.11	.28	-.16	.42
44. 友達が少ないと感じる	.52	.24	-.12	.26	.41
48. 仲の良かった友達との関係が、気まずくなった	.50	.18	.15	.03	.31
46. 周りの人に名前を忘れられた	.49	.04	-.01	.25	.31
2. 周りの人のことを信じられないと感じた	.43	.16	.17	-.10	.25
41. 自分の生き方に自信が持てない	.14	.80	-.17	-.01	.70
35. 自分のやっていることに意義を見いだせなかった	.07	.74	.05	-.05	.55
37. 自分の気持ちを素直に表現できなかった	.12	.69	.07	-.07	.50
29. ふと我に返って、人生がむなしくなった	.30	.58	-.15	.05	.45
13. この先どうしてよいかかわからないと感じた	.19	.44	.20	-.02	.27
43. 自分の死について考えた	.20	.41	-.12	.10	.23
34. 一緒に頑張っていた友達が、あきらめてしまった	.14	.38	.23	.09	.22
14. 自分の意見にみんなが反対した	.14	-.07	.71	.08	.53
16. 友達の中で、自分だけが必修の単位を落とした	.17	-.06	.60	.01	.39
15. グループの中で、うまく立ち回れなかった	.27	.07	.59	-.07	.44
3. 自分だけが、責任の重い仕事を任された	-.08	.12	.57	-.03	.35
6. 頼みたいことがある時に、気軽に人にものを頼めなかった	.14	-.02	.39	.06	.17
12. 周りの友達と自分の価値観が違っていることに気づいた	.01	.24	.37	.23	.25
53. 休みの日に予定がなかった	.20	-.04	-.19	.72	.59
47. 友達の中で、自分だけ恋人がいない	.29	-.21	.08	.59	.49
51. 一人で映画を見に行った	.25	-.11	.04	.57	.40
30. コンサートに一人で行った	.27	-.09	.10	.52	.36
32. 一人でご飯を食べた	.07	.03	.05	.50	.26
19. つきあっている彼（彼女）がいない	.23	-.01	-.01	.48	.29
28. 学校の友達と、学外で過ごす機会があまりない	.27	.13	-.08	.44	.29
39. 周りの人から尊敬されて特別扱われた	-.14	.18	.11	.37	.20
残余項目					
55. 自分の誕生日に誰も気づかなかった	.58	-.14	.01	.30	.45
5. 自分を、よくわかってくれる人がいると感じたとき	.52	-.16	-.04	-.33	.41
25. 自分の言ったことが、グループの中で無視された	.51	-.06	.47	-.11	.49
49. 人と連れ立って歩いた	.42	-.28	-.05	-.41	.42
22. 自分は役に立たないと感じた	.36	.37	.08	-.05	.28
42. 特に理由はないが、ふと気持ちが沈んだ	.33	.60	-.14	.00	.49
10. 家族とけんかをした	-.07	.48	.31	-.03	.34
50. 家族と意見が合わない	-.20	.44	.30	.15	.35
18. 周りの友達と比べて、自分は劣っていると感じた	.17	.37	.36	-.04	.30
7. 友達にあいさつをして、返事がなかった	.35	-.16	.54	-.06	.44
11. 一人だけ友達と違う授業をとった	.09	-.17	.47	.34	.38
23. 自分だけ、会話の内容についていけなかった	.36	-.09	.41	.07	.31
33. 友達と意見が衝突した	-.07	.33	.38	.25	.32
20. 友達の中で、自分だけ成績が良かった	-.30	.03	.30	.51	.44
26. 友達の中で、自分だけが飛び抜けて成功した	-.33	.13	.31	.45	.42
4. 一日を漠然と過ごした	-.06	.30	-.13	.39	.27
52. 親しい人の死について考えた	.31	.28	.19	-.04	.21
27. 周りの人が、自分に対して遠慮をする	.20	.18	.15	.13	.11
45. 一人でやりとげなければならない事柄に取り組んだ	-.04	.19	.33	.28	.23
21. 逢いたい恋人に逢えなかった	.21	.14	.24	.14	.14
8. 親しい友達と離れていてあまり会う機会がない	.04	.25	.23	.21	.16

青年期の“孤独観”を測定する尺度の作成

の負荷が高かった。これらのことより、第3因子を「集団からの疎外、逸脱による孤独」因子と命名した。

次に、第4因子に関して、第53項目「休みの日に予定がないとき」の負荷が.72、第47項目「友達の中で、自分だけ恋人がいないとき」の負荷が.59、第51項目「一人で映画を観に行ったとき」の負荷が.57と、一人で行動するという項目や、一緒に行動する人がいないという項目への負荷が高かった。これらのことより、第4因子を「共行動者の不在による孤独」因子と命名した。

各項目の平均値、標準偏差を見たところ、第1因子の関係の欠乏を表すような状況に対しては、全体的に「孤独だ」とみなす割合が高いようであるが、第4因子の共行動者の不在を示すような状況に対して「孤独だ」と判断するかどうかには、かなりの個人差があるようである。試みに、複数の因子へ.30以上の負荷を示した項目をのぞき、逆転項目に関する処理をした上で、各因子への負荷が.35以上の項目について、高い負荷を示した因子名を独立変数、各項目の平均値を従属変数とする1元配置の分散分析を行った。群の主効果は有意であり（ $F(3,31)=32.88, p<.01$ ）、多重比較の結果、第1因子に高い負荷を示す項目の平均値が、他の項目に比べて高い

ことがわかった。それぞれの因子に関係のある項目の平均値および標準偏差を表4に示す。第2因子から第4因子までの差は統計的に有意ではないが、第1因子から順に平均値が低くなっており、第1因子が他の因子に比べて「より孤独だと感じられ」、第2因子から順に、孤独だと感じにくくなっていくことがわかる。このことから、能力測定テストにおける「困難度因子」にあたるような、「孤独度因子」のようなものが抽出されている可能性も考えられる。

複数の因子へ.30以上の負荷を示した項目をのぞき、逆転項目に関する処理をした上で、各因子への負荷が.35以上の項目の和を対応する因子の尺度得点とした。各尺度の信頼性を検討するために α 係数を計算したところ、第1因子から順に.92、.82、.75、.77で、内的整合性に関しては十分な値が得られた。しかし、これは単に一因子性が高いことを象徴しているだけなのかもしれない。逆転項目を逆転させた後のすべての項目の和の α 係数は.95と、かなり高い値であった。

3) 想定した構造との対応について

孤独観56項目について、調査を行う前に想定した構造（「差」「存在意義」「物理的一人」「対人関係」の4面）と因子分析の結果から得られた構造との対応を表5に示す。各項目が、想定したものとは違う形でグルーピングされていることがわかる。「差」は、4つの因子に分かれたが、強いて言えば第3因子に対応する。「存在意義」は第2因子に対応する。「物理的一人」は、下位概念の「物理的一人」が第4因子、「課題」が第3因子に対応す

表4 孤独観因子別項目平均値及び標準偏差

	平均	SD	項目数
対人的関係の欠乏	4.0	0.22	14
対 自	3.3	0.18	7
疎外・逸脱	3.2	0.33	6
共行動者の不在	3.0	0.29	8

表5 想定した構造と因子分析の結果との対応

場 面	下位概念/因子	欠 乏	対 自	疎 外	不 在
差	劣等感	17	18	16, 23	47
	成 功	(-20), (-26)		20, 26	39, (20)
存在意義	ふ と		42		4
	運 命		29, 43, 52		
	自己劣等感		13, 22, 35, 41		
物 理 的	物理的	49		11	30, 32, 51, 53
	課 題			3, 11, 45	
対人関係	理解不可	2, 5, 9, 24	10, 33, 50	12, 14	
	関係欠乏	1, 9, 31, 36, 38, 40, 44, 46, 54, 55		6	19, 28, 30, 47, 53, (55)
	喪 失	17, 48, 52, 56	34		21
	疎外・スキル	2, 6, 9, 17, 24, 25, 46	37	7, 14, 15, 23, 27, (25)	
	会えない		8	21	28

※ 数字は項目番号

※ 行は想定した場面、列は最も高い負荷を示した因子を示す。

※ 複数の因子に.35以上の負荷を示した項目については、()は2番目に高い負荷を示した因子を表す。

※ -は、負荷が負であることを表す。

る。「対人関係」は大部分が第1因子に対応するが、下位概念の「理解不可」の一部が第2因子、「疎外・スキル欠如」の一部が第3因子、「関係欠乏」の一部が第4因子に対応している。

第1因子は対人関係に関する因子と見なすことができる。第2因子には「存在意義」の他に「理解不可」の項目が加わっているが、他人から理解されないことによって自分自身の存在意義を疑う、といったことを考えると、存在意義に関する因子と見なすことができる。第3因子は「差」に関する項目、「物理的一人」のうち課題に関する項目、「対人関係」の「理解不可」および「疎外・スキル欠如」に関する項目である。他人と差があることや一人でやらなければならない課題があることが、否定的な意味で捉えられていると考えると、この因子は「疎外されること」に関する項目の集合であると解釈できる。第4因子は「物理的一人」に関する項目と「関係欠乏」に関する項目の集合である。他人との関係が欠乏すると物理的に一人になることが多いと考えると、この因子は物理的一人に関する因子と見なすことができるが、調査前に想定したものとは、意味が多少異なる。

4) 孤独観尺度の下位尺度間の関係について

表6に孤独観尺度の下位尺度間の相関係数を示す。尺度間相関は、どれも.50を超えており、かなり高い。1因子性が高いことや、「孤独度因子」が抽出されている可能性なども考えると、孤独を感じやすい人はどの項目も孤独だと評価し、そうでない人は、どの項目もあまり孤独だと評価しない、といった傾向があるのかもしれない。

当該の下位尺度以外の下位尺度の影響を除き、偏相関係数を求めた(表7)。どの相関も有意であったが、特に、 α 係数の高かった「対人関係の欠乏による孤独」尺度と「対自的孤独」尺度との偏相関が高かった($r=.40$, $p<.01$)。また、「対自的孤独」尺度と「共行動者の不在

表6 孤独観下位尺度間の相関係数

	欠 乏	対 自	疎 外
対 自	.62***		
疎 外	.59***	.67***	
不 在	.51***	.57***	.62***

***: $p<.001$ **: $p<.01$ *: $p<.05$

表7 孤独観下位尺度間の偏相関係数

	欠 乏	対 自	疎 外
対 自	.40***		
疎 外	.28***	.21***	
不 在	.26***	.16***	.25***

***: $p<.001$ **: $p<.01$ *: $p<.05$

による孤独」尺度との偏相関が他に比べて少し低く($r=.16$, $p<.01$)、自己の存在意義が感じられなくなるときに孤独だと感じる人は、他者との精神的な繋がりが希薄だと感じる場合にも孤独だと感じるが、物理的に一緒に行動する人がいないときに孤独だと感じるとは限らない、ということがわかる。

2. 既存の尺度 (UCLA, LSO, NPI-S, IOS) について

表8に、既存の尺度についての平均値および標準偏差を示す。

1) UCLAについて

Russel, Peplau & Cutrona (1980) にもとづき、逆転項目を逆転した後、すべての項目の和を改訂版 UCLA 孤独感尺度得点 (以下, UCLA 得点) とした。 α 係数は.88であった。表8より, UCLA 得点の平均値は39.8で、中点の50より低い。全体として、現在孤独だと感じている人が少ないということがわかる。

2) LSOについて

落合 (1983) によると, LSO は LSO-E (個別性への気づきに関する次元) と LSO-U (共感可能性に関する次元) の2つの次元から成り立っている。まず, 落合 (1983) にならって2つの下位尺度得点を算出した上で, 各尺度得点の平均値を算出した。LSO-E の α 係数は.64, LSO-U の α 係数は.86で, LSO-E の α 係数がやや低かった。LSO-E の平均値は1.5, LSO-U の平均値は8.6と、どちらも中点より高い。全体としては、個別性に気づいており、また、人間はお互いに共感可能だと感じているということがわかる。LSO の結果をもとに被験者を4タイプに分類した (欠損値やどちらかの次元で0点であるなどの理由から、分類不能者は57名)。A 型が168名, B 型が9名, C 型が40名, D 型が246名であった。落合 (1988) によると, 孤独感の類型上の発達の変化は, A→B→C→D の順であり, 年齢とともに A 型の占める割合が減り, D 型の占める割合が増える。落合 (1985) では, 各類型の割合は, 16才では A 型と D 型が 1/3 ずつ, B と C がその半分ずつであり, 19才では D 型が 2/3 を占め, A, B, C 型はほぼ同数, といった割合であるが, 今回の調査では16才のパターンに近い割合であった。落合のデータは約18年前のものであり, その頃に比べて現在の学生の発達が遅れているということも考えられる。しかし, 個別性への気づきに関する項目を見ると, 個別であることを否定的なニュアンスで捉えている項目が多い。「自分は自分でしかなく, 他の人になったりすることはあり得ないし, 最終的には自分のことは自分で責任を持たなければならないけれど, だからといって,

表8 既存の尺度の平均値および標準偏差

	尺 度	人数	平均	SD	中点	理論最小値	理論最大値
LSO	E (個別性への気づき)	461	1.5	5.12	0	-14	14
	U (共感可能性)	455	8.6	6.67	0	-18	18
	UCLA	462	39.8	9.23	50	20	80
IOS	人間志向性	225	38.0	5.83	30	10	50
	対人的関心・反応性	222	23.2	3.99	18	6	30
	個人主義	223	8.9	1.58	9	3	15
NPI-S	優越感・有能感	232	25.8	6.76	30	10	50
	注目賞賛欲求	232	31.9	8.08	30	10	50
	自己主張性	231	30.6	6.89	30	10	50

※ 中点は、尺度の真ん中の値を示す。

※ 理論最小(大)値は、取りうる最小(大)の値を示す。

ひとりぼっちということではなく、温かい人間関係を営むことができる」というように考える人は、個別性に気づいている上で、それを前向きに捉えることができる、という意味で、D型がさらに発達したタイプとも考えられるが、LSOの類型上ではA型に分類される可能性もある。このタイプをA'とすると、孤独感の類型上の発達的变化は、A→B→C→Dの先に、さらにA'となると考えられるが、A'はLSOの類型ではA型と区別することが困難であり、B型がC型より少ないことを考えると、A型が多いのはA'が多いためであり、むしろ18年前に比べて発達が進んでいる可能性もある。どちらにせよ、18年前に比べて、人間同士は共感可能だと考える人が多いことがわかる。UCLA得点の平均値が高いことから、人間関係について、現在の自分の状況を悲観的に捉えている人が少ないことがわかる。

LSO-EとLSO-Uは負の相関($r = -.35, p < .01$)を示していたが、これはB型に分類される被験者が極端に少なかったことによるものと考えられる。

3) NPI-Sについて

小塩(1998b)によると、自己愛尺度(NPI-S)は、3つの下位因子(優越感・有能感因子、注目賞賛欲求因子、自己主張性因子)に分けられる。ここでは、孤独観尺度の総得点と、孤独観尺度の4つの下位因子ごとに、自己愛尺度との関係を見ることとする。小塩(1998b)をもとにNPI-Sの下位尺度得点を求めたところ、 α 係数は、優越感・有能感尺度が.88、注目賞賛欲求が.89、自己主張性尺度が.83で、比較的高い値が得られ、ある程度信頼性の高い尺度であると言える。

4) IOSについて

斎藤・中村(1987)によれば、改訂版対人志向性尺度(IOS)は、3つの下位因子(人間関係志向性因子、対人的関心・反応性因子、個人主義傾向因子)に分けられる。まず、IOS尺度の本研究における信頼性を確認するため

α 係数を算出したところ、人間関係志向性が.76、対人的関心・反応性が.69、個人主義傾向が.52、全体尺度が.80であり、全般的にあまり高い値は得られなかった。

3. 孤独観尺度と孤独に関する既存尺度(UCLA, LSO)との関連

1) UCLA との関連

表9に、孤独観下位尺度得点と既存の孤独感尺度得点との相関を示した。UCLA得点との関係を孤独観尺度の下位尺度ごとにみると、「対人関係の欠乏による孤独」尺度(以下、「対人関係の欠乏」尺度)は $r = -.12$ 、「対自的孤独」尺度は $r = .06$ 、「集団からの疎外、逸脱による孤独」尺度(以下、「集団からの疎外、逸脱」尺度)は $r = .04$ 、「共行動者の不在による孤独」尺度(以下、「共行動者の不在」尺度)は $r = -.03$ と、どの下位尺度とも有意な相関は得られなかった。「どのような状況を孤独と感じるか」と「実際にどの程度孤独感を抱いているか」との間には、関連がないようである。

表9より、孤独観下位尺度との相関を見てみると、全体ではLSO-Eとはほぼ無相関を示し、LSO-Uとは、「対人関係の欠乏」尺度($r = .30, p < .01$)と「共行動者の不在」尺度($r = .12, p < .05$)において有意な相関が得られたが、「共行動者の不在」尺度との相関は値が低く、意味のある相関は「対人関係の欠乏」尺度との相関のみであろう。人間同士は共感しあえると思っている人ほど、共感できない状況に対して孤独感を強く感じると考えら

表9 孤独観尺度と既存の孤独感尺度との相関

	欠 乏	対 自	疎 外	不 在
LSO-E	-.03	.03	-.03	.00
LSO-U	.30***	.09	.07	.12
UCLA	-.12*	.06	.04	-.03

***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$

れる。

また、孤独観の各下位尺度得点を、その尺度を構成する項目の数で割った得点の平均値および標準偏差をLSOのタイプ別に算出した(表10)。

B型の人数が少ないので統計的検定は行わないが、タイプによって調整後の平均値のパターンに多少の違いが見られる。A型とD型はほぼ同じパターンを示しており、「対人関係の欠乏」に関しては孤独だと感じるが、その他の3つに関してはそれほど孤独でもないと評価しており、3つの下位尺度間には差が見られない。B型については、「対人関係の欠乏」の他に、「集団からの疎外、逸脱」も同様に孤独だと評価しているのが特徴である。B型は、人間は共感不可能であると考える一方で、人間の個別性には気づいていない型であるが、他人から理解してもらえないことを何度か経験しているのだが、そのことをまだ消化し切れないという感がある。自分と他者に隔たりが感じられる場合に、やや被害妄想的に、自分は疎外されていると感じてしまうのかもしれない。C型では、やはり「対人関係の欠乏」を孤独だと感じるようだが、「共行動者の不在」に関しては、むしろ逆転项目的な評価をしているのが特徴である。また、C型は人数の割に標準偏差が大きく、下位尺度得点の分布を見ると、どの尺度でも双峰型に近い。UCLA 孤独感尺度で高得点を示した被験者は、その大部分がLSOの類型判別ではC型に分類されている。C型には現在孤独な状況に陥っている人が多いが、そのことについて、自分は今まさに孤独であると認識している人と、いわゆる「孤独」であることは当然であるので、今更、自分が今、特に孤独であるとは思わない人の、両方が混在しているように思われる。

それぞれのタイプの特徴を見るために、孤独観プロフィールを作成した。各下位尺度得点の中点を基準に、中点よりも得点の高い人をH群、中点よりも得点の低い人をL群とすると、4つの下位尺度に関して16通りのプロフィール(どれかの得点の中点の場合を除く)ができる。それぞれのプロフィールの人数をLSOのタイプ別に表11に示す。

強いていえば、C型において、すべてがLの人数が多

いが、LSOのタイプによって典型的なプロフィールがあるとはいえない。全体で見ると、4つの因子がすべてH、つまり、どの因子についても孤独だと感じる人が3割にものぼった。逆に4つの因子がすべてL、つまり、どの因子についてもあまり孤独だと感じない人は16人と少なかった。ここからも、今回用意した項目が、多くの人にとって「孤独だ」と感じられる項目ばかりに偏っていたことがうかがえる。また、例えば第2尺度に関してL群に分類されたのに第3尺度に関してH群に分類されている、といったような、H-Lのパターンが矛盾しているのは331人の内、85人であるのに対し、矛盾がないのは、すべてH、またはすべてLを除くと112人であった。ここにも孤独観尺度の一因子性が高かったことが反映されているといえよう。

また、LSOのタイプ別に孤独観尺度との相関係数を算出した(表12～表14、ただし、人数が少ないので、B型は除外した)。タイプ別によると、LSOの下位尺度得点のばらつきが小さくなるので、相関もまた小さくなることが考えられるが、部分的に有意な相関が得られた。

A型では「対人関係の欠乏」尺度、「対自的孤独」尺度とLSO-Uとの間に有意な相関が得られた(それぞれ、 $r=.28, p<.01$; $r=.16, p<.05$)。A型では他者と共感できている人ほど、対人関係が希薄になった場合に孤独だと感じるのだろう。また、他者と共感できている人ほど、自分の存在意義を感じられなくなった場合に孤独だと感じるのがわかる。C型では「対人関係の欠乏」尺度以外でLSO-Uと有意な相関が得られた(「対自的孤独」尺度から順に $r=.32, p<.05$; $r=.41, p<.01$; $r=.49, p<.01$)。特に「共行動者の不在」尺度との相関が高く、人間同士は共感可能でないと感じている人ほど、具体的な状況(物理的に一人である状況)に対して孤独でないと評価することが示された。D型では下位尺度とLSO-Uとの相関は認められず、LSO-Eと「対人関係の欠乏」尺度との間にのみ有意な相関が得られた($r=.13, p<.05$)。しかし、その値は低く、全体的に無相関と言ってもよいだろう。D型では、共感できているほど共感しあえない状況で孤独を感じる、といったような、人間観と孤独観との対応がないのかもしれない。

表10 LSOタイプ別 孤独観下位尺度得点(項目数で除した得点)

LSO型	対人関係欠乏	対 自 的	疎外・逸脱	共行動者不在	N
A	4.1 (.64)	3.3 (.77)	3.2 (.75)	2.9 (.84)	144
B	3.7 (.49)	3.1 (.69)	3.4 (.54)	2.9 (.59)	7
C	3.5 (1.11)	3.1 (1.04)	3.1 (.93)	2.6 (.82)	37
D	4.1 (.65)	3.3 (.81)	3.2 (.77)	3.1 (.81)	210

()は標準偏差

青年期の“孤独観”を測定する尺度の作成

表11 LSO タイプ別 孤独観プロフィールの内訳

				LSO タイプ					
欠乏	対自	疎外	不在	A	B	C	D	計	(%)
H	H	H	H	40	1	6	71	118	(35.6)
			L	16	2	5	25	48	(14.5)
		L	H	4	0	1	15	20	(6.0)
			L	13	0	3	12	28	(8.5)
	L	H	H	6	1	2	7	16	(4.8)
			L	11	0	3	11	25	(7.6)
		L	H	6	0	0	3	9	(2.7)
			L	13	2	1	20	36	(10.9)
L	H	H	H	1	0	2	2	5	(1.5)
			L	1	0	1	1	3	(0.9)
		L	H	0	0	0	0	0	(0.0)
			L	1	0	0	1	2	(0.6)
	L	H	H	0	0	0	0	0	(0.0)
			L	1	0	2	1	4	(1.2)
		L	H	0	0	0	1	1	(0.3)
			L	5	0	5	6	16	(4.8)
計				118	6	31	176	331	(100)

※ 各尺度得点の midpoint より高い得点を取った者を H 群, 低い得点を取った者を L 群とした

表12 孤独観尺度と既存の孤独感尺度との相関 (A 型)

	欠 乏	対 自	疎 外	不 在
LSO-E	-.09	-.03	-.15	-.01
LSO-U	.28***	.16*	.05	.10
UCLA	-.11	.00	.02	-.04

表13 孤独観尺度と既存の孤独感尺度との相関 (C 型)

	欠 乏	対 自	疎 外	不 在
LSO-E	.06	.07	-.07	-.27
LSO-U	.30	.32*	.41**	.49**
UCLA	.29	.20	.12	.03

表14 孤独観尺度と既存の孤独感尺度との相関 (A 型)

	欠 乏	対 自	疎 外	不 在
LSO-E	.13*	.08	.01	.01
LSO-U	.10	-.02	-.06	.04
UCLA	.00	.16*	.14*	.04

4. 孤独観尺度と欲求に関する尺度 (NPI-S, IOS) との関連について

1) 孤独観尺度と自己愛尺度 (NPI-S) との関連について

まず, NPI の 3 つの因子 (優越感・有能感, 注目賞賛欲求, 自己主張性) の特徴について言及する。小塩 (1998c) によると, 優越感・有能感は, “強い自己肯定

感” に裏打ちされている。自己主張性因子は, “能動的かつ積極的な項目群” から成っているが, その一方で “やや自己中心的” な側面も持つ。注目賞賛欲求には, “受動的かつ願望的な意味合い” も込められている。また, 小塩 (1998a) では, NPI とマレーによる MNPI (下位因子; 自信・自己中心性, 評価過敏, 他者の排除) との関係調べている。そこでは, 注目賞賛欲求因子と

MNPIの3下位因子との間には、いずれも高い正の関連が見られた(順に .54, .46, .34; すべて $p<.01$) が、優越感・有能感、自己主張性因子とMNPIの間には、自信・自己主張性因子のみと正の関連が見られた(順に .68, .56; ともに $p<.01$)。これにより、NPI-Sで測定される自己愛尺度の下位因子には、いずれも、自己中心的な傾向が見られるが、そのうち注目賞賛欲求については、さらに他者に対して評価過敏となったり、他者を排除したりする傾向とも関連が見られることが示唆される。

孤独観尺度との相関(表15)を見ると、孤独観尺度の総得点とNPI-Sの「注目賞賛欲求」尺度との間に正の相関($r=.29$, $p<.01$)が、「自己主張性」尺度との間に負の相関($r=-.18$, $p<.01$)が見られた。また、孤独観尺度のすべての下位尺度と、NPI-Sの「注目賞賛欲求」尺度との間に正の相関が見られた(「対人関係の欠乏」尺度から順に .28, .27, .20, .19; いずれも $p<.01$)。また、孤独観尺度のすべての下位尺度と、NPI-Sの「自己主張性」尺度との間に、弱いながらも負の相関が見られた(「対人関係の欠乏」尺度から順に $-.17$, $-.15$, $-.15$, $-.14$; 「対人関係の欠乏」尺度のみ $p<.01$, 他は $p<.05$)。優越感・有能感尺度と孤独観尺度の下位尺度との間には、関連が見られなかった。

孤独観尺度の総得点と、NPI-Sの「注目賞賛欲求」尺度との間に正の関連が見られたことから、自己中心的だけれども評価過敏な人は、他者に注目されたいという欲求を持っている場合、他者が存在するような対人場面での問題で満たされないと孤独を感じると認識されるのではないと思われる。よって、そういった対人場面を想定している「対人関係の欠乏」尺度と「集団からの疎外、逸脱」尺度で、関連が見られたのであろう。また、対自的次元においても、他者にはめられたいという欲求が影響して、なにより大切な自分に自信が持てない状況では、ほめられるに足る人ではなくなるので、ほめられないだろうから孤独を感じるだろうと認識したのではないと思われる。

また、本研究では、孤独観尺度の総得点と、NPI-Sの「優越感・有能感」尺度との間には関連がみられず、「自己主張性」尺度との間には負の相関が見られたが、

その値は小さかった。その一方で、NPI-Sの「優越感・有能感」尺度、「自己主張性」尺度は、UCLAの得点との間には負の相関が見られた(順に $-.26$, $-.25$; ともに $p<.001$)。UCLAは主に、実際の交友関係や社会的スキル能力に由来する孤独感を測定していると考えられる。優越感・有能感が高い人や自己主張性が高い人は、こういった実際の交友関係の状態を(本当に正しい認識をしているかどうかは別として)ある程度良好と認識していて、孤独感を感じる事が少ないと思われる。しかし、優越感・有能感が高い人は、対人関係においても、実際の交友関係の状態に関わらず、自分うまくやっていると認識する傾向がある。従って、「ある状況におかれた場合、孤独とを感じるか」といった孤独観について聞かれた場合、「私はそういう状態に陥ったとしてもうまくやれるはずだ」と認識してあまり問題にしない傾向が見られる人と、「私は実際にはそういった状態にならないけれども、そういった状態になったとしたら孤独だ」と認識する人と両方が見られたことにより、関連がない結果となったのかもしれない。また、自己主張性が高い人は能動的で積極的なので、自己主張性の高い人ほど孤独な状況に陥りにくく、孤独な状況を想像しても、あまり深刻に受け止めない傾向があるのかもしれない。

2) 孤独観と改訂版対人志向性尺度(IOS)との関連について

表16に孤独観尺度とIOSの相関を示した。孤独観尺度の総得点と、孤独尺度の4つの下位尺度ごとに、改訂版対人志向性尺度との関係を見ることとする。

まず、孤独観尺度の総得点とIOSの「対人的関心・反応性」尺度との間に有意な正の相関($r=.45$, $p<.01$)が見られ、IOSの「人間関係志向性」尺度との間にも弱いながらも有意な正の相関($r=.24$, $p<.01$)が見られた。

また、孤独観尺度の「対人関係の欠乏」尺度では、IOSの「人間関係志向性」尺度との間に正の相関($r=.34$, $p<.01$)、「対人的関心・反応性」尺度との間に正の相関($r=.53$, $p<.01$)が見られた。孤独観尺度の「対自的孤独」尺度および「集団からの疎外、逸脱」尺度では、IOSの「対人的関心・反応性」尺度との間に正の相関($r=.36$, $.29$ いずれも $p<.01$)が見られた。孤

表15 自己愛尺度と孤独観の各尺度間の相関

	欠 乏	対 自	疎 外	不 在	孤独観総得点
優越感・有能感	-.10	-.06	-.07	-.02	-.08
注目賞賛欲求	.28***	.27***	.20***	.19***	.29***
自己主張性	-.17**	-.15*	-.15*	-.14*	-.18**

***: $p<.001$ **: $p<.01$ *: $p<.05$

表16 改訂版対人志向性尺度と孤独観の各下位尺度との相関

	欠 乏	対 自	疎 外	不 在	孤独観総得点
人間関係志向性	.34***	.12	.11	.08	.24**
対人的関心・反応性	.53***	.30***	.29***	.14*	.45***
個人主義傾向	-.01	-.03	-.08	-.03	-.03

***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$

孤独観尺度の「共行動者の不在」尺度は、IOSの「対人的関心・反応性」尺度との間に弱いながらも有意な正の相関 ($r = .14$, $p < .05$) が見られた。しかし、その値は小さく、関連が見られなかったと言ってもよいだろう。

孤独観尺度の「対人関係の欠乏」尺度とIOSの「人間関係志向性」尺度の間に有意な正の相関が見られたが、IOSの「人間関係志向性」尺度は、斎藤・中村 (1987) においてEPPS性格検査のうちの親和動機尺度との間に.68という高い相関があったことから、「人間関係志向性」尺度は親和的な人間関係を求める程度を表しているものと考えられる。また、孤独観尺度の「対人関係の欠乏」尺度は構成する項目から、対人希求についての内容を表しているものと考えられる。これらのことから、人間関係志向性が高い人は、対人希求的な状況を孤独と見なす傾向があるのではないかとと思われる。

また斎藤・中村 (1987) によれば、IOSの「対人的関心・反応性」尺度は、狭義の対人志向性の概念を反映しているものと考えられる。今回の結果では、この「対人的関心・反応性」が孤独観尺度の下位尺度のうち、「共行動者の不在」尺度を除く3つの尺度との間に有意な正の相関が見られた。このことはつまり、IOSの高い人は他者との関係の対人的側面に敏感に反応し、他者の行動の多様性に関心を持ち反応する (斎藤・中村, 1987) ことから、孤独観尺度の各下位尺度が表している対人希求性や疎外感にも敏感であり、そのような状況について孤独と見なす傾向が高くなるのではないかとと思われる。ここで孤独観尺度の「対自的孤独」尺度は、自らを内省して孤独を感じるという内容であるものと考え、対人的関心・反応性の得点が高い人は対人的に敏感であるがゆえ他人から見た自分や自分についての内省傾向も高くなるものとも考えられる。このため、両者の間に正の相関があらわれてくるのではないかとと思われる。

IOSの個人主義傾向因子については、本研究においては信頼性係数が低いこともあり、この因子の結果についてそれほどはっきりと言及することはできない。しかしこの因子を構成する項目の内容そのものが、個人主義傾向というよりは、対人関係における他人との距離のとり方についての価値観を表しているとも考えられる。この尺度が作成されたのは10年以上も前であることから、昨

今の青年における友人関係の在り方そのものが親密な人間関係であっても、ある一定の距離は保つ傾向に変化してきていると想定するならば、今回の調査対象となった大学生にとって、これらの項目が表す内容はいわば当然であって、個人差はあるにしろ全体的に見るとそれ以外の孤独観や対人志向性などの在り方に影響を及ぼさないのではないかと考えられよう。

5. UCLA, LSO と IOS, NPI-S との関連

孤独観尺度以外の尺度間の相関を表17に示す。

まず、UCLA と LSO との相関を見ると、UCLA と LSO-E とは正の相関 ($r = .39$, $p < .01$) が、LSO-U とは負の相関 ($r = -.68$, $p < .01$) が見られた、他者と理解し合える、共感できると考えている人や、スムーズな人間関係を築いていこうと考えている人は、現状では孤独をあまり感じていないようである。言い換えると、本研究の被験者が、実際にはあまり高い孤独感を抱いていないという結果には、現在の人間関係に満足しており、また他者と理解・共感できているという考えが反映されているのではないだろうか。UCLA の得点が高いという意味で実際の孤独感が高いC型は、人間同士は理解できないと思い、かつ個別性に気づいている型と説明されていることから、孤独に対してあきらめのような感覚を抱いているとも考えられる。

一方、UCLA と、IOSの「人間関係志向性」尺度との間に負の相関 ($r = -.65$, $p < .01$)、IOSの「対人的関心・反応性」尺度との間に弱いながらも負の相関 ($r = -.20$, $p < .01$) が見られた。UCLA は主に、実際の交友関係や社会的スキル能力に由来する孤独感を測定していると考えられる。このことから、常に親和的な人間関係を求め、他人との関係に関心がある人は自らを孤独な状況にしておくことはせず、さみしい思いはしなくて済むということかもしれない。

また、UCLA と、NPI-Sの「優越感・有能感」尺度および「自己主張性」尺度との間に、弱い負の相関が見られた (それぞれ、 $r = -.25$, $p < .01$; $r = -.26$, $p < .01$)。自分が有能だと感じている人ほど、孤独を感じていないことがわかる。これは、自分が有能だと感じている人は、対人関係においてもうまくいっていると認知す

表17 既存の尺度間の相関

	LSO		UCLA	IOS			NPI		
	LSO-E	LSO-U		IOS-1	IOS-2	IOS-3	NPI-1	NPI-2	NPI-3
LSO-E 個別性への気づき	1.00								
LSO-U 共感可能性	-.35***	1.00							
UCLA	.39	-.68***	1.00						
IOS-1 人間関係志向性	-.28***	.61***	-.65***	1.00					
IOS-2 対人的関心・反応性	-.08	.41***	-.23***	.50***	1.00				
IOS-3 個人主義	.01	.09	-.05	.13*	.09	1.00			
NPI-1 優越感・有能感	-.02	.16*	-.26***	—	—	—	1.00		
NPI-2 注目・賞賛欲求	.07	.11	-.01	—	—	—	.43	1.00	
NPI-3 自己主張性	.05	.15*	-.25***	—	—	—	.59	.42	1.00

***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$

※ IOSとNPIについては、同じ被験者についてのデータがないので、相関の計算ができない。

る傾向があるためだと考えられる。また、自己主張性が高い人ほど、孤独を感じていない傾向が読みとれる。自己主張性が高い人は積極的で能動的なので、積極的に他者に対して働きかけををすると思われるので、孤独な状況に陥りにくいのかかもしれないが、自己主張性が高い人は、他者の評価を気にせず、自己中心的な特徴も有している。自己主張性が高い人ほど、自分の対人関係はうまくいっているはずだと認識する傾向があるのかもしれない。

LSO-EとはIOSの「人間関係志向性」尺度で負の相関($r = -.28, p < .01$)が見られた。LSO-UとはIOSの「人間関係志向性」尺度と「対人的関心・反応性」尺度で正の相関(それぞれ $r = .61, p < .01$; $r = .41, p < .01$)が見られた。共感可能だと思うほど対人的関心が強く、個別性に気づいていれば、逆に対人的関心はそれほど高くないことが指摘できるであろう。これらの結果からは、個別性に気づいている程度が高いほど、どんな場面でも常に親密な関係を保持しようとはしないことが示唆される。また、人間同士は共感可能であると考え、人間関係志向性が高く、対人的関心・反応性が高いことから、人が互いに共感しあうためには、人間関係を尊重し、他者の反応に注意を払う必要があることが示唆される。このため、人間同士は共感不可能であると思っているほど、他者との関係が希薄になって孤独感が強くなり、人は一人なのだと思っているほど、親密な関係がなく、孤独感が強くなると考えられる。

IOSの「個人主義傾向」尺度は、いずれの尺度とも関連が見られなかったが、これは、 α 係数が低いためかもしれない。

次に、LSOのタイプ別に尺度間の相関係数を算出した(表18～表20)。A型では全体での結果とほぼ同様の

結果を示していた。C型ではLSO-UとIOS個人主義傾向とが負の相関($r = -.53, p < .05$)を示し、共感できないと思っているほど個人主義傾向が低いことが示された。D型ではLSO-EとLSO-Uの間に相関が認められなかった。LSO-EとLSO-Uの間の相関は、A型のみに見られた特徴であった($r = -.23, p < .01$)。その他は、全体での結果とほぼ同様の結果を示した。

総合考察

本研究は、青年の孤独観を、孤独を感じる場面という視点から網羅的に測定することを第1の目的とした。本研究で作成した孤独観尺度56項目の平均値から、全体的に孤独であると認識される項目が全体の3/4と、かなり多い結果となった。また、孤独観の因子分析により、4因子(「対人関係の欠乏による孤独」「対自的孤独」「集団からの疎外・逸脱による孤独」「共行動者の不在による孤独」)が見出された。このうち、第1因子の「対人関係の欠乏による孤独」が、他の因子に比べて、より孤独だと認識されやすい結果となった。また、全項目に関する α 係数の高さや尺度間相関から、孤独を感じやすい人はどの場面でも孤独であり、そうでない人はどの場面についてもそうでない、という傾向が見られるようである。しかし、場面によって孤独の感じやすさに差が見られ、対人関係そのものがないことが最も孤独と認識されやすく、何か行動をする場合に共行動者がいないことは、他に比べるとそれほど孤独ではないということも示唆された。最近、対人関係の希薄化の問題が叫ばれており(松井, 1990)、若者が深い友人関係よりも浅く広い友人関係を好む傾向にあるということがいわれているが、友人との関係自体がないことに関しては、やはり孤独であると認識していることが示された。また、注目すべき点として、第2因子として対自的孤独が抽出されているが、

青年期の“孤独観”を測定する尺度の作成

表18 既存の尺度間の相関（A型）

	LSO		UCLA	IOS			NPI		
	LSO-E	LSO-U		IOS-1	IOS-2	IOS-3	NPI-1	NPI-2	NPI-3
LSO-E 個別性への気づき	1.00								
LSO-U 共感可能性	-.23**	1.00							
UCLA	.15*	-.57***	1.00						
IOS-1 人間関係志向性	-.19	.56***	-.65***	1.00					
IOS-2 対人的関心・反応性	-.15	.23***	-.23*	.48***	1.00				
IOS-3 個人主義	.02	.09	.17	.26*	.12	1.00			
NPI-1 優越感・有能感	-.05	.16*	.15	—	—	—	1.00		
NPI-2 注目・賞賛欲求	-.08	.11	.16	—	—	—	.44***	1.00	
NPI-3 自己主張性	-.25	.15*	.29**	—	—	—	.63***	.54***	1.00

※ IOSとNPIについては、同じ被験者についてのデータがないので、相関の計算ができない。

表19 既存の尺度間の相関（C型）

	LSO		UCLA	IOS			NPI		
	LSO-E	LSO-U		IOS-1	IOS-2	IOS-3	NPI-1	NPI-2	NPI-3
LSO-E 個別性への気づき	1.00								
LSO-U 共感可能性	-.50***	1.00							
UCLA	.29	-.47**	1.00						
IOS-1 人間関係志向性	-.25	.29	-.68**	1.00					
IOS-2 対人的関心・反応性	-.36	.43	.00	.22	1.00				
IOS-3 個人主義	.27	-.53*	.22	-.27	-.36	1.00			
NPI-1 優越感・有能感	-.18	-.10	-.50*	—	—	—	1.00		
NPI-2 注目・賞賛欲求	.39	-.40	.45*	—	—	—	.33	1.00	
NPI-3 自己主張性	.09	-.36	-.09	—	—	—	.64**	.57**	1.00

※ IOSとNPIについては、同じ被験者についてのデータがないので、相関の計算ができない。

表20 既存の尺度間の相関（D型）

	LSO		UCLA	IOS			NPI		
	LSO-E	LSO-U		IOS-1	IOS-2	IOS-3	NPI-1	NPI-2	NPI-3
LSO-E 個別性への気づき	1.00								
LSO-U 共感可能性	.01	1.00							
UCLA	.13	-.51***	1.00						
IOS-1 人間関係志向性	-.04	.41***	-.42***	1.00					
IOS-2 対人的関心・反応性	.15	.28**	-.14	.45***	1.00				
IOS-3 個人主義	.00	.03	-.01	.13	.06	1.00			
NPI-1 優越感・有能感	.14	.14	-.25**	—	—	—	1.00		
NPI-2 注目・賞賛欲求	.13	.06	-.02	—	—	—	.46***	1.00	
NPI-3 自己主張性	.16	.31	-.37***	—	—	—	.57***	.33***	1.00

※ IOSとNPIについては、同じ被験者についてのデータがないので、相関の計算ができない。

統計的には有意ではないものの、孤独の度合いとしては2番目に孤独であると認識されていることが示された。UCLAでは主に対他的な次元を扱い、LSOにおいても「自分に自信がない時」などの対自的次元を扱ってこなかった。このような先行研究で扱ってこなかった孤独の

次元が、本研究において明確に抽出されたと考えられる。本研究のこのような対自的次元からの孤独を、自分のあるべき自己像と現実自己の間のずれから出てくる感情の一つと考えると、孤独感の定義としてよく用いられる「願望水準と実際の間のずれ」の示される領域に、新た

な側面からの視点を与えると考えられるだろう。また、第3因子に「集団からの疎外・逸脱による孤独」が抽出された。現代青年の特徴として、傷つきたくないという「ふれあい恐怖」(山田・安東・宮川・奥田, 1987)が言われているが、実際の場面で疎外される場合には孤独を感じるということが示された。実際の人間関係では、あまり明確な疎外を感じる場面がないので、孤独を感じる度合いとしては3番目に位置されたのではないだろうか。最後の第4因子として「共行動者の不在による孤独」が抽出された。これは、高木(1985)が、現代の日本青年の価値観の特徴として「個人優先」という点に言及しているように、近年の生活スタイルの個人化を反映して、それほど孤独とを感じる度合いが高くなかったのではないかと考えられる。以上から、孤独に関して、実際に人間関係が無い場合を、現代青年は一番孤独とを感じるが、次に自分について問題が出てきた場合に孤独を感じる、つまり、全く人間関係がないのはいやだけれども、自分の問題に関しての孤独を次に重視するという、個人化された対人関係のあり方を反映した結果となったと考えられる。

また、落合のLSOをもとにした孤独の4つの捉え方によって、孤独観がどのように異なってくるのかについて調べた。LSOのA型からD型まで、どの型についても、孤独観の第1因子「対人関係の欠乏」については、孤独だと認識している結果となった。それ以外の孤独観の因子について、A型とD型は、第1因子以外についてはそれほど孤独でないということが示された。しかしA型は、孤独観第1・2因子とLSO-Uとの間に正の相関が見られ、他者との共感可能性に関する信念が孤独観を規定している傾向が示された。B型は、他の型に比べて、第3因子「集団からの疎外・逸脱」をより孤独とみなしていることが示された。C型は、孤独観第4因子「共行動者の不在」因子について、孤独とみなしていない人が存在していた。これらの結果から、LSOでいう孤独に対する捉え方が異なっても、「対人関係の欠乏」場面については、共通して孤独と認識することが示された。また、LSOでいう孤独の捉え方によって、実際孤独と捉える場面が異なるものとしては、A型で他者との共感ができるかどうか、孤独を感じるかどうかに影響していること、またC型で、共感可能でなければ、共行動者がいなくても孤独でないと評価することが示された。このように、人間観が発達的に変化したとしても、孤独を感じる場面については、やはり同じように孤独であり続ける場面と、変化していく場面が存在する。特に、共感可能とを感じるかどうかによって、孤独とを感じる場面が異なってくることが明らかにされたと言えよう。この

点については、LSOだけでは測定できないような側面を、孤独観尺度が有効に拾いあげていると考えられる。

また、本研究では、孤独観と対人志向性・自己愛の関連を調べることで、孤独観の特徴を明確化することを第2の目的とした。結果として、孤独観の第1因子「対人関係の欠乏」因子と対人志向性の第1因子「人間関係志向性」との間に正の関連が見出された。また、孤独観のすべての因子と、対人志向性の第2因子「対人的関心・反応性」因子との間に正の相関が見出された。これらの結果から、人間関係を希求する人ほど、対人関係そのものがない場面に孤独を感じやすく、また、対人的側面に敏感に反応する人ほど、他者の行動や対人関係場面だけでなく、そこからくる対自的な場面についても孤独を感じやすい傾向があることが示唆される。また、孤独観と自己愛尺度については、孤独観尺度のすべての因子と自己愛尺度の第2因子「注目・賞賛欲求」因子との間に正の関連が見出された。自己愛的な傾向のうち、他者にほめられたい、注目されたいという欲求は、他者との関係で満たされない場面だけでなく、対自的な場面における孤独にも影響を与えるということが示唆されたと言える。このように、本研究の孤独観尺度は、特に対人的な側面への敏感さが、対他的な場面と対自的な場面の両方に関連しているということが示された。対人的な側面への敏感さが、対自的な場面にまで影響を与えているその背景には、他者との関係で受容されているかどうか、また他者との関係がうまくできているかという点から、自分についての自信や信頼感が成立しているからではないかと考えられる。

問題点・今後の展望

本研究の問題点として、以下の2点が考えられる。まず、孤独観尺度については、孤独な状況であると判断される項目が全体の4分の3に達し、得点が高いほど孤独であるとする方向に質問の内容が偏ってしまったという点である。これは、項目の選び方や、教示の提示の仕方にも問題があったと考えられる。そして第2に、場面を想定して回答することの限界が挙げられる。実際に経験したことがない事柄は想像しづらいだろう。この点に関する今後の改善法としては、実際に経験したことがあるかどうかについて、経験の程度を測定する指標を設けることである。この2点は、さらなる検討が必要であろう。

また、今後の展開としては、孤独観と自我発達の程度を測る指標との関係を見ることが挙げられる。LSOも発達の側面を考慮に入れているが、その類型には人数的な偏りが見られ、十分に機能していないと考えられる。LSOだけでなく、他の側面から自我発達の程度を測る

指標（例えば、自我同一性など）との関連も調べていくと、より理解が促進されるであろう。また、孤独観が発達的にどのように変化するかという点についても、実際に調べる必要性がある。本研究では、孤独観も発達的に変化することを仮定して大学生にアプローチしたが、実際大学生以外の世代では、どのような孤独観の形態をとるのかという点についても今後、調べていくことが望まれよう。

引用文献

- Berg, J. H., & Peplau, L. A. 1982 Loneliness: The relationship of self-disclosure and androgyny. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 624-630.
- Chelune, M. E., Sultan, F. E., & Williams, C. L. 1980 Loneliness, self disclosure and interpersonal effectiveness. *Journal of Counseling Psychology*, 27. (5), 462-468.
- 広沢俊宗・田中国夫 1984 異なった関係における孤独感尺度の構成 社会学部紀要, 49, 179-188.
- 堀 淑昭 1963 孤独と連帯の構造 人間の科学 誠信書房, 3, 68-78.
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究 (I) - 孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討 - 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- 工藤 力・西川正之・熊取谷由季夫 1985 孤独感に関する研究 (II) - 孤独感の因果帰属の検討 - 大阪教育大紀要, 34, 149-157.
- 工藤 力 1986 思春期の孤独感に関する研究 心理学研究, 57, 293-299.
- 久世敏雄 1962 第4章 友人・異性との関係 松村康平・西平直喜 編著 青年心理学 朝倉書店
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫 編著 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp.283-296.
- 諸井克英 1984 孤独感とペットに対する態度 実験社会心理学研究, 24, 93-103.
- 諸井克英 1985 高校生における孤独感と自己意識 心理学研究, 56, 237-240.
- 諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, 26, 151-161.
- なだい nada 1967 レトルト 文学界, 21, 4, 12-83.
- 西川隆蔵 1998 第17章 学校環境 33. 青少年の自己開示 詫摩武俊・青木孝悦・杉山憲司・二宮克美・越川房子・佐藤達哉 性格心理学ハンドブック 福村出版
- 落合良行 1974 現代青年における孤独感の構造 (I) 教育心理学研究, 22, 3, 162-170.
- 落合良行 1983 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究, 31, 4, 332 - 336.
- 落合良行 1985 生活感情の関連構造からみた青年期の孤独感に関する特徴 - 児童期・成人期・老年期との比較 - 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), 35, 157-164.
- 落合良行 1988 第20章 青年の友情と孤独 西平直喜・久世敏雄 1988 青年心理学ハンドブック 福村出版
- 大日向 雅美 1990 第6章 青年から成人へ 無藤隆・高橋恵子・田島信元 1990 発達心理学入門II - 青年・成人・老人 - 東京大学出版会
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 自己愛的人格の基礎的研究 (I) - 自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について - 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 534-535.
- 小此木啓吾 1971 現代精神分析 I 誠信書房 Pp.199-201.
- 小此木啓吾 1979 青年期の孤独 青年心理 金子書房, 12, 16-28.
- 小塩真司 1998a 自己愛傾向の二側面に関する検討 教育心理学論集 (名古屋大学大学院教育心理学専攻編集; 1997年度), 27, 19-32.
- 小塩真司 1998b 青年の自己愛傾向と友人関係 - 高校生を対象として - 日本教育心理学会 第40会大会発表論文集, 148.
- 小塩真司 1998c 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- Peplau, L. A., & Perlman, D. 1982 Loneliness: A Sourcebook of Current Theory, Research and Thrapy. John Wiley & Sons, Inc. (ペプロー・パールマン加藤義明監訳 1988 孤独感の心理学 誠信書房)
- Perlman, D., & Peplau L. A. 1981 Toward a social psychology of loneliness. In Gilmour, R. & Duck, S. (Eds.) Personal relationships: 3. Personal relationships in disorder. London: Academic Press.
- Raskin, R., & Hall, C. S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. 1980

- The revised UCLA loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 3, 472-480.
- Russell, D., Peplau, L.A., & Ferguson, M.L. 1978 Developing a measure of loneliness. *Journal of Personality Assessment*, 42, 3, 290-294.
- Rubin, J.Z., & Brown, B.R. 1975 *The social psychology of bargaining and negotiation*. New York: Academic Press.
- 斎藤 和志・中村 雅彦 1987 対人的志向性尺度作成の試み 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学), 34, 97-109
- 佐方哲彦 1986 自己愛人格の心理測定－自己愛人格目録 (NPI) の開発－和歌山県立医科大学進学課程紀要, 16, 63 - 76
- Sermat, V. 1978 *Sources of loneliness*. Essence, 2, 4, 271-276.
- Swap, W.C., & Rubin, J.Z. 1983 Measurement of interpersonal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 208-219.
- 高木秀明 1985 現代青年の価値観 瀧本孝雄他 (編著) 現代青年の心理と行動 福村出版
- 戸田 晋 1970 第5章 孤独と連帯 斎藤耕二 現代青年の意識と行動 2 生活感情の展開 大日本図書
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 1987 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究 (第2報): ふれあい恐怖 (会食恐怖) の本質と家族研究 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23, 2, 206-215.
- Weiss, R. 1973 *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*. Cambridge, The M.I.T. Press.

(2000年9月16日 受稿)

ABSTRACT

An Attempt to Construct the View of Loneliness Scale

Yasuko NOGAMI, Yuko AMAYA, Nobuyuki OTA, Touji KURITA, Mitsuyo FUSE,
Moyuko NISHIMURA, Misako HASEGAWA, and Oinju Hu

There are many scales to measure loneliness such as UCLA Loneliness Scale, though they are almost measures of the extent to which a person feel lonely. But taking account of what situations are recognized as lonely by a person is important to measure how lonely a person feel, because situations one feels lonely vary with the individual. The purpose of this study was to construct a scale to measure the “View of Loneliness” i.e., what situations are considered lonely by a person.

For this purpose, we made item pool consisted of 191 items concerned to the view of loneliness and 56 items were kept finally. Male ($n=113$) and female ($n=410$) students in college or vocational school answered those items together with LSO, UCLA, and IOS or NPI-S. Factor analysis was conducted on responses to 56 items, and constructed four subscales of View of Loneliness Scale: loneliness from lack of interpersonal relations, loneliness from taking note of one's own self, loneliness from estrangement or deviation from groups, and loneliness from an absence of accompanying persons. These subscales correlated positively each other. Comparisons of means between subscales revealed that “lack of interpersonal relation” was considered lonelier, although “absence of accompanying persons” was not very.

To examine relationships between the view of loneliness and the extent and quality of loneliness, we compared our new scale with other established loneliness scales. No high correlation between new scale and old ones suggest that a person who considers many situations lonely were not necessarily lonely. In addition, relationships between two traits (interpersonal orientation and narcissistic personality) and the view of loneliness were discussed.

Key words : view of loneliness, extent of loneliness, adolescence, scale construction.